

実験操作が虚偽認知に与える影響の検討

— 真実デフォルト理論に着目して —

伊藤洋輔・森永康子

Effects of experimental procedures on lie recognition

Yosuke Ito and Yasuko Morinaga

It has been pointed out that conventional experimental procedures might distort results about lie recognition. Levine (2014) argues in his Truth-Default Theory (TDT) that people usually trust others but that they can quickly abandon their trust when witnessing a trigger event in which they examine why the person told a lie. He also stated that asking participants to judge which stimulus persons are lying in experiments can work as a “lie prime” (i.e., a trigger event). Furthermore, when participants are asked to think about lies, this may increase the estimated frequency of lies. We conducted two studies to investigate the effects of the following instruction: “Please determine who told a lie.” Instead of asking participants to determine who is lying, we asked participants to give their impressions of stimulus persons, based on the presumption that an individual positively evaluates others who tell the truth. Study 1 employed a between-participant design but we found that the instructions had no significant effects. Study 2 employed a within-participant design and we found that the lie instructions had significant effects on lie recognition in evaluating stimulus persons. In the without-lie-instruction condition, stimulus persons were more likely to be positively evaluated than those in the with-lie-instruction condition. Our study suggests that researchers should be more careful about what instructions they give to participants in lie recognition experiments.

キーワード : Truth default theory, lie detection, lie recognition

問 題

嘘については、これまでにいくつもの研究がおこなわれてきた。嘘に関する研究の中には、どのような状況で他者が疑わしいと感じるのか (虚偽認知) についての研究であったり、他者の発言の真偽を判別することができるのか (虚偽検出) についての研究であったりと様々な研究がある。虚偽認知研究と虚偽検出研究については、“嘘” を研究の対象として扱い、“嘘をつかれた際の反応” を検討するという点では似ているものの、研究の目的という面では異なっている。

まず、虚偽認知研究に関しては、対人関係の中でのコミュニケーションに焦点があてられること

が多い。例えば、村井 (2000, 2002) の研究では、日常会話においてどのような要因によって嘘っぽく思われるのかが検討され、伊藤・平川・中島・森永 (2015) の研究では他者の発言を本当だと思うことで、相手との関係継続意思を高めるのかという検討が行われている。

一方で、虚偽検出研究に関しては、虚偽検出の正確性について焦点があてられることが多い (e.g., Reinhard, Greifeneder, & Scharmach, 2013)。人間の虚偽検出の正確性については、チャンスレベルを上回することはほとんどないため (e.g., Bond & DePaulo, 2006)，その虚偽検出能力の正確性をどのように向上させていくかについての検討を行う研究が多い。

以上のように、嘘に関する研究においては様々な側面からの検討が数多く行われている。しかし、近年において、こういった嘘全般に関する従来の研究について、いくつかの問題点があることが指摘されている (e.g., Levine, 2014, McCornack, Morrison, Paik, Wisner, & Zhu, 2014)。そのうちの1つとして、Levine (2014) は、真実デフォルト理論 (Truth-Default Theory: TDT) の中で、“虚偽のプライム”の有無が実験結果に影響を及ぼしていることなどを論じている。この指摘に関して、先行研究に触れながら説明すると、例えば、伊藤ら (2015) の研究では、嘘の入った刺激を参加者に提示した後で、“今回の実験の手続き (刺激) には嘘が含まれている”という説明を行うという方法を採用している。一方で、木藤・児玉 (2003) の研究においては、同様の説明をした後に刺激の提示を行うという方法を採用している。これらはどちらも虚偽検出能力に関して行われた研究であり、どちらも一様に“嘘をつかれた際の反応”を測定しようとした研究である。しかし、これらの結果は同一の虚偽検出能力を測定しているのだろうか。“嘘がある”と思いながら見た刺激に対する反応と、そのようなことを意識せずに見た刺激に対する反応は、異なったものとして捉えるべきではないだろうか。本研究では、そういった虚偽実験に対する指摘に関する検討を行う。

本研究では、Levine (2014) の定義に従い、虚偽を“意図的に、あるいは知っていながらわざと他の人をミスリードすること”と定義する。厳密に言えば、嘘と虚偽は異なる意味をもつが、本研究では嘘と虚偽を同様のものとして扱って研究を行う。

真実デフォルト理論

TDT とは、McCornack & Parks (1986) の“真実バイアス理論”をベースにした、虚偽と虚偽検出に関する理論である。“真実バイアス”とは、“本当に正直かどうかとは関係なく、他者が正直にコミュニケーションをしていると信じる傾向”と定義される。TDT では、“真実バイアス”が人間にとって高い適応をもたらすと想定している。これは、虚偽検出という行動は、虚偽発見自体を目標にしているのではなく、コミュニケーションの成功と効率化を目標にしているからである。つまり、ほとんどの人がほとんどのコミュニケーションにおいて正直であるという現状において、“真実バイアス”は、コミュニケーション内容の吟味等に認知資源を割かないようにすることで、高い適応をもたらすと考えられている。

TDT では、人は基本的には (デフォルトでは) 他者を信じる傾向にあるが、同時に他者が必要に応じて嘘をつくことがあることも知っているため、嘘をつく理由 (ここではトリガーイベントという) があることを知れば、その真実デフォルトが放棄されるとしている。トリガーイベント (以下 :

トリガー)には以下の5つの種類がある。それは、1. 計画された動機。2. 不誠実な態度と関連した行動の提示。3. メッセージ内容の一貫性のなさ。4. コミュニケーション内容と既有知識との不一致。5. 第三者からの警告の5つである。特に、第三者からの警告は真実バイアスの低下を促進し (e.g., McCornack & Levine, 1990), 計画された動機についても嘘をつく意図の明示により真実バイアスの低下が促進される (Levine, Kim, & Blair, 2010) という結果が得られている。また、トリガーとして機能するためには、2種類の閾値を超える必要があると考えられている。2種類の閾値とは、真実デフォルトを放棄するための閾値と、積極的に相手を疑ってかかる閾値である。前者を超えた場合でも、後者を超えなかった場合、疑いを抑えるようになるか、真実デフォルトの状態に戻ると考えられている。そして、後者を超えた時、相手への積極的な疑いが発生すると考えられている。

従来の虚偽実験における、“誰が嘘をついているか判断してください”という内容の教示は、上述の“第三者からの警告”というトリガーとみなすことができよう。そのため、前述の伊藤ら (2015) の研究の手続きでは、参加者は刺激視聴の際には真実デフォルトの状態にあるが、木藤・児玉 (2003) の研究の手続きでは参加者は刺激視聴の際には真実デフォルトが放棄されていると考えられる。結果として、刺激視聴の段階で刺激に対して疑う姿勢を持っているかどうか異なっている為、虚偽検出実験としての手続きとしては同様のものとは言えないと考えられる。

真実デフォルト状態での虚偽実験

上述したように、従来の虚偽実験における“誰が嘘をついているか判断してください”という内容の教示は、“第三者からの警告”というトリガーとみなすことができよう。そのため、そういった教示を与えることなく虚偽認知および虚偽検出を行う必要がある。そこで、本研究では、嘘の存在を示唆する教示を行わずに、参加者の虚偽認知を測定する方法として、虚偽認知に関連した態度の測定を行う。虚偽認知に関連した態度について、伊藤ら (2015) の研究では、他者の発言を本当だと思えることが発言した相手に対する好意度を媒介して、相手への関係継続意思を高めるという結果が得られている。また、大工・釘原 (2015) の研究では、商品に対する虚偽認知が、対象の商品に対する態度や評価に負の影響を及ぼすという結果が得られている。そのため、虚偽認知と関連があるこれらの項目を従属変数として使用することで、直接嘘の存在を認知させることなく、対象に対する虚偽認知を間接的に観測することが可能となるのではないかと考えられる。つまり、本研究において、虚偽認知を求める際のトリガーに抵触しないようするために、好意度を虚偽認知の代替測度として用いて研究を行う。

本研究の目的

以上を踏まえ本研究では、“嘘がある (誰が嘘をついているか判断してください)”という教示 (以下:嘘の教示)の有無が虚偽認知と虚偽検出に及ぼす影響について検討する。これに加えて、本研究では、“計画された動機”というトリガーに抵触する条件を設ける。さらに、“メッセージ内容の一貫性のなさ”や“コミュニケーション内容と既有知識との不一致”に抵触する条件も設ける。これについて、本研究で扱う刺激の中には、伊藤ら (2015) の実験で“不自然である”と評

価されたものも含まれている。この“不自然である”と評価された刺激（以下：不自然刺激）が，“不自然である”と評価されるのは、上述の2つのトリガーに抵触しているためと推測できる。本研究では、これらの教示内容と不自然な内容の動画を用いて、複数のトリガーに抵触する条件についても検討を行う（Table 1）。これまで、複数のトリガーに抵触する条件について検討された研究はない。しかし、現実場面において、複数のトリガーに抵触する状況（ex. 嘘をつく可能性と嘘をつく動機があることを知りえる状況）は少なからず存在する。本研究では、そのような状況において、複数のトリガーがどのように虚偽認知に影響を与えるのかについても検討していく。真実デフォルトの放棄が促進され、相手への積極的な疑いが発生した状態においては疑わしい内容（トリガー数）が多いほど、虚偽認知はより深まると推測できる。なお、本研究では、トリガーの有無のみを問題とし、例え同じトリガーが複数ある場合でも、トリガー数は1と考える。例えば，“今から見ていただく人物の何人かは嘘の内容を話しています”という教示も，“今見ていただいた人物は本当のことを話していたと思いますか、嘘を話していたと思いますか”という教示も、同様の“第三者からの警告”にあたり、こうした教示が複数あった場合でも，“第三者からの警告”についてのトリガー数は1と考える。

また、本研究では、虚偽検出の正確性に関しても、教示内容の違いが与える影響について検討を行う。これについては、上述したように、虚偽検出と虚偽認知については扱っている目的が異なるため、虚偽認知と虚偽検出それぞれについて検討を行う必要があると考えられるからである。本来であれば、“嘘判断”を求めた時点で、真実デフォルトが放棄されるため、嘘教示の有無による違いがなくなり、結果に差が生じることはないと考えられる。しかし、刺激を視聴した時点で参加者が刺激人物に抱く印象は異なると考えられるため、虚偽検出の結果に何らかの影響を与える可能性も考えられる。このことについての検討を行う為に、虚偽検出の正確性についても、嘘教示の有無が与える影響の分析を行う。以上のように、本研究では虚偽検出の正確性についても検討するため、刺激の内容についても実際に本当のことを述べているもの（以下：真刺激）と実際には嘘を述べているもの（以下：嘘刺激）を扱う。

また、虚偽認知や虚偽検出に影響を及ぼす可能性のある個人変数として研究1では、一般的信頼尺度（山岸・小見山, 1995）を取り上げる。一般的信頼とは，“開かれた社会における自立した個人が持つ、他者一般ないし人間性一般に対する信頼”と定義される。従来の虚偽検出実験では、一般的信頼と虚偽検出の正確性との関連は見られておらず（伊藤ら, 2015），また信頼感の高低と騙されやすさは関係がないことが示されている（Rotter, 1980a, 1980b）。しかし、山岸（1998）は、他者一般に対する信頼が高い人は、他人が信頼できるかどうかにか気を使っているとしており、このこと

Table 1
本研究で扱うトリガーイベント

教示内容	嘘教示無 = 0		嘘教示有/動機無 = 1		嘘教示有/動機有 = 2	
	普通 = 0	不自然 = 1	普通 = 0	不自然 = 1	普通 = 0	不自然 = 1
合計トリガー数	0	1	1	2	2	3

から、一般的信頼の高い人は、何もない（嘘の教示が無い）状態において、相手への評価を適切に下すことができると考えられる。

本研究の仮説

本研究の仮説は以下の4つである。第1に、嘘教示無条件の参加者は、真実デフォルト状態であるため、嘘教示有・動機無条件に比べて刺激人物への評価が高くなる（仮説1a：Table 1の嘘教示無条件と嘘教示有・動機無条件の比較）。また、トリガーが多いほど刺激人物への評価が低くなる（仮説1b：Table 1の合計トリガー数による比較）。第2に、嘘判断（誰が嘘をついているか判断する）の段階では、嘘があるかもしれないという第三者からの警告があるため、嘘教示が無かった参加者も真実バイアスが低下する。その結果、嘘教示の有無によって他者の言っていることを真だと判断する割合（以下：真判断割合）では差が見られなくなる（仮説2a：Table 1の嘘教示無条件と嘘教示有・動機無条件の比較）。しかし、他のトリガー（動機の有無、不自然か否か）については人物評価の段階においても、嘘判断の段階においても、同様にトリガーに抵触しているため、トリガーの数の影響は見られる（仮説2b）。第3に、教示内容の違いによって、虚偽検出の正確性が変わることはない（仮説3）。仮説3について、本来であれば、不自然刺激か否かというトリガーについても検討すべきであると考えられるが、本研究では、実験で用いた不自然刺激の数が、真刺激と嘘刺激との間で異なっている為、本研究では考慮せず、教示内容のみでの検討を行う。第4に、嘘教示無条件において、一般的信頼の高い人は、低い人に比べて嘘をついている刺激人物への評価が低くなる（仮説4）。仮説1から仮説3については研究1と研究2で、仮説4については研究1で検討する。

研究1

目的

トリガーイベントに抵触する条件が虚偽認知や虚偽検出の正確性に与える影響および一般的信頼が虚偽認知に与える影響について検討する。

方法

1. **実験参加者** 国立大学の学生60名（男性35名、女性25名、年齢19.9歳、SD=1.51）
2. **実験計画** 教示内容（3:嘘教示有・動機有条件/嘘教示有・動機無条件/嘘教示無条件：参加者間要因）×刺激の内容（2:普通刺激/不自然刺激：参加者内要因）×刺激真偽（2:真刺激/嘘刺激：参加者内要因）の3要因混合計画。“動機有条件”とは“『刺激人物は「うまく嘘をつけた人には謝礼が上乘せされる」という教示を得ている』と知らされる条件”であり、これはTDTにおける、“1.計画された動機がある”というトリガーに抵触するものと考えられる。“不自然刺激”とは、伊藤（2015）での刺激選定段階において、“内容が不自然である”と評価された動画であり、研究1では、嘘刺激の中に4本含まれている。
3. **刺激** 伊藤ら（2015）で使用した刺激を用いる。この刺激は以下の手続きにより作成したものである。まず、私立大学の大学生9名（男性6名・女性3名）に好きな・嫌いなテレビ番組とその

理由について、好きな番組を好き (真刺激) ,好きな番組を嫌い (嘘刺激) と言ってもらい、その様子を録画した (嫌いな番組についても同様)。研究1では、これらの刺激を組み合わせ、8本 (内訳として真刺激4,嘘刺激4,また好きな動画についての刺激4,嫌いな動画についての刺激4) からなる虚偽刺激セットを2種類 (合計16本) 作成した。2種類のデータセットの再生時間については有意差がなかった (*ns.*)。また、1つのデータセットには同じ刺激人物は含まれず、刺激人物の提示順序および真刺激と嘘刺激の提示順序はランダムに行った。

4. 手続き 「他者への印象評価の形成過程に関する実験」という名目で、講義の時間前後に参加者募集を行った。また、その際に、一般的信頼尺度への記入を求めた。

同意の得られた参加者を実験室に呼び、個別にコンピュータによる刺激提示を行った。まず、参加者に対して改めて “他者への印象評価の形成過程に関する実験” であると説明した後、動画についての説明 (“登場人物が、好きなテレビ番組、または嫌いなテレビ番組について話している”) を行った。その後、嘘教示無条件に対しては “動画を戻したりしないように” などの実験に関する注意点について説明し、刺激を提示した。嘘教示有・動機無の条件については、 “今から見ていただく人物の何人かは嘘の内容を話しています。ここでいう嘘とは、本当はそのテレビ番組が好きであるのに、嫌いな理由を話していた場合。あるいは、本当はそのテレビ番組が嫌いであるのに、好きな理由を話していたという場合である” という教示を行った後、実験に関する注意点を説明し、刺激を提示した。嘘教示有・動機有の条件については、嘘教示有・動機無の説明に加えて、 “動画の人物に対しては、上手く嘘を話していた場合には、「謝礼を増額する」と伝えてあります” と教示した。1人提示するごとにその人物に対する評価について回答を求め、全刺激提示後、真偽判断とフェイス項目についての回答を求めた。

その後、全ての条件ともに、デブリーフィングを行った。

5. 測定項目 ① 一般的信頼尺度 (6項目,7件法), ②各刺激人物への評価:伊藤 (2015) が使用した関係継続意思 “その人物と仕事のパートナーになりたいと思うか” 1項目に加え、大工・釘原 (2015) が使用した態度に関する3項目 (“魅力的だ”, “良い印象を抱く”, “嫌いだ (逆転項目)”) の計4項目を使用した (5件法)。③虚偽判断 (1本の刺激について虚偽判断,2件法), ④フェイス項目 (性別・年齢)

結果

1. 仮説1の検討 8人の刺激人物それぞれに対して、4つの評価項目の平均点を算出し、好意度とした ($\alpha=.708\sim.876$)。まず、仮説1aについての検討を行った。独立変数を嘘教示の有無 (嘘教示無条件と嘘教示有・動機無条件), 従属変数を8人の人物への好意度とした対応のないt検定を行った。その結果、嘘教示無 ($M=3.034, SD=0.276$) と嘘教示有 ($M=2.939, SD=0.262$) との間に有意差は見られなかった ($t(38)=1.119, ns, d=.347$)。従って、嘘教示無条件は嘘教示有・動機無条件に比べて刺激人物への評価が高くなるという仮説1aは支持されなかった。

次に、仮説1bについての検討を行った。独立変数をトリガーの合計数, 従属変数を好意度とした一元配置分散分析を行った。今後トリガーの合計数による分析の際には、参加者が判断した8つの

刺激をネスト化されたデータと位置付けて分析を行う。その結果、トリガーの数の主効果は見られなかった ($F(3,476) = 0.423, ns, \eta_p^2 = .003$)。従って、トリガーが多いほど刺激人物への評価が低くなるという仮説 1b も支持されなかった。

2. 仮説 2 の検討 まず、仮説 2a の検討を行った。独立変数を嘘教示の有無 (嘘教示無条件と嘘教示有・動機無条件)、従属変数を真判断割合とした対応のない t 検定を行った。その結果、嘘教示無 ($M = 0.647, SD = 0.068$) と嘘教示有 ($M = 0.563, SD = 0.111$) との間に有意差が見られ ($t(38) = 2.918, p = .006, d = .905$)、嘘教示無条件の方が嘘教示有・動機無条件よりも真判断が多かった。この結果から、嘘教示の有無によって真判断割合に差が見られないという仮説 2a は支持されなかった。

次に仮説 2b の検討を行う、独立変数をトリガーの合計数、従属変数を真判断割合とした一元配置分散分析を行った。その結果、トリガーの数の主効果は見られなかった ($F(2,476) = 0.645, ns, \eta_p^2 = .003$)。また、以上のことから、教示の有無以外のトリガーの影響が見られるという仮説 2b は支持されなかった。

3. 仮説 3 の検討 独立変数を教示内容 (嘘教示無/嘘教示有・動機無/嘘教示有・動機有)、従属変数を虚偽検出の正確性とした一元配置分散分析を行った。その結果、教示内容の主効果は見られなかった ($F(2,57) = 0.932, ns, \eta_p^2 = .032$; Figure 1)。しかし、効果量 η_p^2 が .032 と小さな効果量を示していたことから、教示内容によって、虚偽検出の正確性が変わることはないという仮説 3 についても支持されなかった。

4. 仮説 4 の検討 一般的信頼尺度の 6 つの項目の回答の平均値を一般的信頼得点とした ($\alpha = .81$)。一般的信頼得点の平均点で、一般的信頼低群と一般的信頼高群に分け、独立変数を一般的信頼の高低と刺激真偽、従属変数を好意度として、教示内容別に 2 要因の分散分析を行った。その結果、嘘教示無条件において、一般的信頼の主効果 ($F(1,17) = 0.195, ns, \eta_p^2 = .011$)、刺激真偽の主効果 ($F(1,17) = 0.037, ns, \eta_p^2 = .002$) および交互作用 ($F(1,17) = 0.278, ns, \eta_p^2 = .016$) は見られなかった。このことから、嘘教示無条件において、一般的信頼の高い人は、低い人に比べて嘘についている刺激人物への評価が低くなるという仮説 4 は支持されなかった。

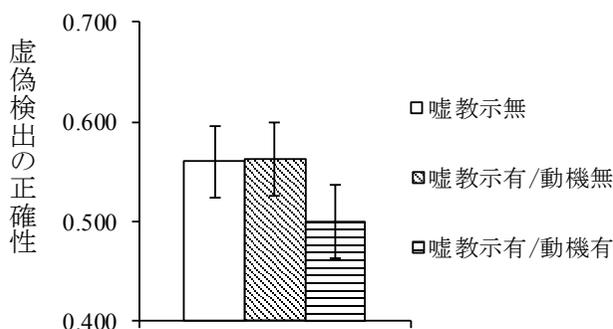


Figure 1. 教示内容が虚偽検出の正確性に与える影響

考察

研究1では、TDTに基づき、トリガーに抵触する条件が、好意度および虚偽検出にどのように影響を与えるのか、また一般的信頼の影響についての検討を行った。

1. 仮説1の検討 仮説1aは、嘘の教示が無い参加者は、真実デフォルト状態であるため、嘘教示有・動機無条件に比べて刺激人物への評価が高くなるというものであり、仮説1bはトリガーが多いほど、刺激人物への評価が低くなるというものであった。しかし、研究1においては、教示内容やトリガー数による有意な結果は見られず、仮説は支持されなかった。

仮説1aが支持されなかった原因として、以下の3つが考えられる。まず1つ目に間接的に虚偽認知を測定する項目として、好意度が適していない可能性である。従来の研究から、関係継続意思を始めとした好意度は虚偽認知や虚偽判断と関係が深いことが示唆されている(伊藤ら, 2015)。しかし、他者への印象を判断する際には、嘘をついているという教示や話の内容とは異なる表情や声質などといった別の基準をもって評価している可能性も考えられる。そのため、好意度が虚偽認知と直接的な関係にあるとは言えず、好意度では差が見られなかったのではないかと考えられる。2つ目に、好意度判断を測定する尺度に“どちらでもない”を入れたことの影響である。今回の研究において、真偽判断の際には真か偽かの2件法で回答を求めている。その一方で、好意判断の際には“どちらでもない”という“真か偽が全く分からない”という言わば未回答とも言える選択肢を用意した。その結果として、真実デフォルトの放棄が促進されている状態にあったとしても、嘘かどうか確信が持てない状態では“どちらでもない”を選択してしまいやすくなったのではないかと考えられる。実際に、研究1においては全体でも約3割、刺激人物によっては約5割の項目で“どちらでもない”が選択されていた。3つ目に嘘教示の有無の操作を参加者間で行っていた影響である。人が他者を判断する際には、“はきはきしゃべる人が好き”であったり、“笑顔の人が好き”であったりと、別々の好意判断の基準を持っている。そのため、本研究のような参加者間での実験の場合、参加者がもともと持っている相手への好意判断の基準が統制できず、その結果として好意度では差が見られなかった可能性があると考えられる。

また、仮説1bが支持されなかったことについては、仮説1aの検討で考察した内容に加えて、以下の理由が考えられる。不自然刺激について、本研究では参加者が8本の刺激を連続して視聴しているため、不自然刺激の内容を視聴しても“その人固有の話し方”といった個人特性に帰属した可能性が考えられる。その為、話し方についての数ある中の1つとして捉えられ、トリガーの放棄には繋がらなかった可能性が考えられる。

2. 仮説2の検討 まず、仮説2aについて、仮説2aは、嘘教示の有無によって他者の言っていることを真だと判断する割合(以下:真判断割合)では差が見られなくなるというものであったが、仮説2aは支持されなかった。仮説2aが支持されなかった理由として以下のことが考えられる。この理由として、同じトリガーが複数あることの影響が考えられる。つまり、嘘教示有・動機無条件は、虚偽判断時においては、“第三者からの警告”についてのトリガーに2回抵触した状態にある。これにより、刺激人物に対して積極的に疑いをもつようになった結果、真判断割合が嘘教示無条件に比べて低下した可能性があると考えられる。

次に、仮説 2b の検討を行う。仮説 2b は、教示の有無以外のトリガーの影響が見られるという仮説 2b というものであったが、これについても支持されなかった。他のトリガーの影響が見られなかったことについては、仮説 1b の検討で考察した内容が関わっているのではないかと考えられる。

3. 仮説 3 の検討 仮説 3 は、教示内容の違いによって、虚偽検出の正確性に差が見られないというものであった。しかし、仮説 3 についても支持されなかった。このことについて、Figure 1 では、嘘教示無条件と嘘教示有・動機無条件との間は効果量が非常に小さかった ($d = -.016$)。一方、多重比較の結果、嘘教示無条件と嘘教示有・動機有条件との間 ($d = .358$) および嘘教示有・動機無条件と嘘教示有・動機有条件との間 ($d = .374$) にはそれぞれ小さな効果量が見られた。小さな効果量が見られた理由については、動機有条件の参加者が他の 2 つの条件の参加者にはない観点からも、虚偽検出を行おうとした可能性が考えられる。例えば、非常に具体的な刺激で、大抵の人が真だと思ってしまうような刺激についても、“報酬がもらえる (動機がある) からより見破られにくい嘘をつこうとしているのではないか” などと思ってしまう可能性があるのではないだろうか。

4. 仮説 4 の検討 結果から、嘘教示無条件において、一般的信頼の高い人は、低い人に比べて嘘をついている刺激人物への評価が低くなるという仮説 4 は支持されなかった。さらに、嘘教示有・動機有群の一般的信頼低群において、刺激真偽の主効果が有意であったことについても仮説とは異なる結果であった。このことについては、以下の理由が考えられる。山岸 (1998) は、他者一般に対する信頼が高い人は、他者が信頼できるかどうか気に使っているとしている。つまり、他人が信頼できるかどうかという情報に敏感であるということである。つまり、そのような情報が多い人に対して、一般的信頼の高低で他者への信頼に差が生じると考えられる。本研究の刺激のような、好きな、あるいは嫌いなテレビ番組という情報は、信頼できるかどうかという情報量に満たなかった可能性があると考えられる。

研究 2

目的

研究 1 では、複数のトリガーに抵触する条件を設定したが、仮説と異なり、嘘教示の有無、動機の有無、刺激の内容は虚偽認知に影響を与えないという結果が得られた。その為、研究 2 では、研究 1 の問題点を改善して実験を行うことで、トリガーに抵触する条件が虚偽認知・虚偽検出に与える影響についてのさらなる検討を行う。具体的には、嘘教示の有無の 2 条件を参加者内要因として実験する。実験を参加者内計画で行うことにより、上述した研究 1 の仮説 1 における“参加者間での実験の場合、参加者がもともと持っている相手への好意判断の基準が統制できない”という問題を回避できると考えられる。しかし、参加者内要因にするために、“計画された動機”の教示の有無は検討しないことにした。また、研究 2 では虚偽認知を測定する項目として、“信用できる” (以下：信用)、“その人物はそのテレビ番組が好きだと感じる” (以下：番組好意) という 2 項目を加えた。これらの 2 項目について尋ねることで、嘘の可能性を参加者に認知させることなく、参加者の虚偽認知をより直接的に尋ねることができると考えられる。また、人物への評価を尋ねる際に、“どちらでもない”という回答をなくし、“全くそう思わない”～“非常にそう思う”の

4 件法で尋ねた。

方法

1. **実験参加者** 国立大学の学生 32 名 (男性 13 名, 女性 19 名, 年齢 19.1 歳, $SD=0.76$)

2. **実験計画** 教示内容 (2:嘘教示有条件/嘘教示無条件:参加者内要因) × 刺激の内容 (2:普通刺激/不自然刺激:参加者内要因) × 刺激真偽 (2:真刺激/嘘刺激:参加者内要因) の 3 要因参加者内計画。

3. **刺激** 研究 1 で使用した刺激の中から, 参加者が好きなテレビ番組として述べているもの (嘘刺激においては実際は嫌いなテレビ番組) のみを選び, 虚偽刺激セットを 2 種類作成した。2 種類のデータセットの再生時間については有意差はなかった (*ns.*)。さらに, 研究 2 では, 不自然刺激が, 嘘刺激の中に 2 本, 真刺激の中に 1 本含まれている。また, 1 つのデータセットには同じ刺激人物は含まれず, 真刺激, 嘘刺激の提示順序はランダムで行った。また, 刺激の提示順序について, 研究 2 では以下のような条件を設けている。(1) 実験全体で, 嘘教示無条件で用いる刺激人物の提示回数と, 嘘教示有条件で用いる刺激人物の提示回数が同数になるようにする。例えば, 刺激人物 A は嘘教示無条件で 16 回, 教示有条件で 16 回提示される。(2) 実験全体で, 最初に提示される刺激人物は刺激人物毎に同数になるようにする。これらの制限を設けた理由は以下のようなものである。研究 2 では, 教示の有無を参加者内要因として実験を行うため, 8 つの刺激の内 4 つを嘘教示無条件, 残り 4 つを嘘教示有条件で行う。その為, ランダムに刺激を提示するとある刺激がどちらかの条件に偏ったり, 最初に提示される刺激が偏ったりする可能性が生じる。刺激によっては参加者全体を通して評価および虚偽認知が一樣に高いものあるいは低いものがある。そうした偏りを統制するために制限 1 を設けた。制限 2 についても, 最初に提示された刺激を後の評価の基準とする可能性がある。そういった刺激提示の順序による影響を極力減らすため, 上述のような制限を設けた。

4. **手続き** 研究 1 とほぼ同様の教示を行った。ただし, 動画についての説明を “登場人物が, 好きなテレビ番組について話している” に変更した。最初に嘘教示無条件での教示を行った後 4 本の刺激提示を行った。研究 1 と同様に, 1 人提示するごとにその人物に対する評価について回答を求め, 4 本提示後, 虚偽判断についての回答を求めた。その後, 嘘教示有条件の教示を行い, 嘘教示無条件と同様の手続きを行った。研究 2 において虚偽判断を 4 本ずつで行ったのは, 嘘教示無条件と嘘教示有条件での刺激提示からの記憶の鮮明さを統制するためである。その後, “他者の印象を答える際に何を基準に判断したとしますか” および “嘘を話していたかどうかを判断する際に何を基準に判断したとしますか” という質問に自由記述で回答を求めた。また, 研究 1 の実施の際に音声聞き取りづらいという指摘をいくつか受けたため, 研究 2 では刺激提示の際にスピーカーを使用した。

その後, デブリーフィングを行った。

5. **測定項目** ①各刺激人物への評価 (6 項目, 4 件法), ②虚偽判断 (1 本の刺激について虚偽判断 (8 項目, 2 件法), ③ 自由記述 (2 項目), ④フェイス項目 (性別・年齢)

結果

1. 仮説1の検討 8人の刺激人物それぞれに対して、相手への評価6項目について確認的因子分析を行ったところ、8人中6人において、番組好意得点の共通性、8人中2人において信用得点の共通性が小さかった ($<.20$)。その為、8人の登場人物それぞれに対して、研究1と同様の4項目の平均点をまとめて好意度 ($\alpha = .703\sim.869$) とし、他2項目については1項目ずつの検討を行った。

まず、仮説1aについての検討を行った。独立変数を嘘教示の有無、従属変数を好意度、信用得点、番組好意得点として、対応のあるt検定をそれぞれ行った。その結果、従属変数が好意度 ($t(31) = -1.166, ns, d = -.258$) および信用得点 ($t(31) = -0.376, ns, d = -.095$) の場合においては、嘘教示の有無による違いは見られなかったものの、番組好意得点において、嘘教示無 ($M = 2.680, SD = 0.403$) と嘘教示有 ($M = 2.398, SD = 0.491$) との間で有意差が見られた ($t(31) = 2.339, p = .026, d = .628$)。従って、嘘教示無条件は嘘教示有条件に比べて刺激人物への評価が高くなるという仮説1aは支持された。

次に、仮説1bについての検討を行った。独立変数をトリガーの合計数、従属変数を好意度、信用得点、番組好意得点として、一元配置分散分析をそれぞれで行った。その結果、1aと同様に従属変数が好意度 ($F(2,253) = 1.141, ns, \eta_p^2 = .009$) および信用得点 ($F(2,253) = 1.174, ns, \eta_p^2 = .009$) の場合にはトリガーの数の主効果が見られなかったものの、番組好意得点の場合にはトリガーの数の主効果が見られた ($F(2,253) = 11.253, p = .000, \eta_p^2 = .082$; Figure 2)。従って、トリガーが多いほど刺激人物への評価が低くなるという仮説1bについても支持された。

2. 仮説2の検討 まず、仮説2aの検討を行った。独立変数を嘘教示の有無、従属変数を真判断割合として対応のあるt検定を行った。その結果、嘘教示無 ($M = 0.555, SD = 0.165$) と嘘教示有 ($M = 0.500, SD = 0.220$) との間に有意差は見られなかった ($t(31) = 1.365, ns, d = .282$)。効果量 d は小さな効果量を示しているものの、仮説1aにおける効果量 d と比較すると小さくなっている。このことから、嘘教示の有無によって真判断割合に差が見られなくなるという仮説2aは支持されたと言える。

次に、仮説2bの検討を行った。研究2では、トリガーが嘘教示の有無と刺激内容しかないため、独立変数を刺激内容 (不自然刺激/自然刺激) 従属変数を真判断割合とした対応のあるt検定を行った。その結果、不自然刺激 ($M = 0.375, SD = 0.402$) と普通刺激 ($M = 0.570, SD = 0.202$) との間で有意差が見られた ($t(31) = -2.275, p = .030, d = -.615$)。以上のことから、嘘教示の有無以外における他のトリガーの影響は見られるという仮説2bは支持された。

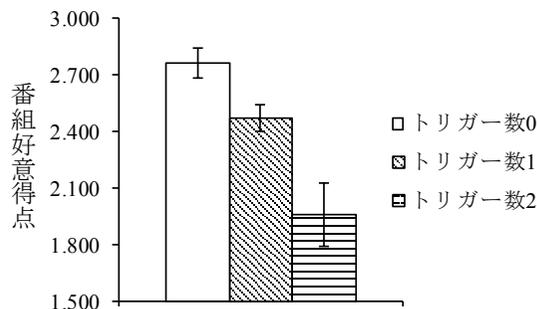


Figure 2. トリガー数が番組好意得点に及ぼす影響

3. 仮説3の検討 独立変数を嘘教示の有無、従属変数を虚偽検出の正確性とした対応のあるt検定を行った。その結果、嘘教示無 ($M = 0.531, SD = 0.275$) と嘘教示有 ($M = 0.641, SD = 0.254$) との間で有意差が見られなかった ($t(31) = -1.542, ns, d = -.415$)。しかし、効果量 d が小～中程度の効果量を示していること、教示無群では虚偽検出の正確性がチャンスレベルを超えていなかった ($t(31) = 0.643, ns$) のに対して、嘘教示有群では、虚偽検出の正確性がチャンスレベルをわずかに超えている ($t(31) = 3.138, p = .004$) という結果から、トリガーの有無によって、虚偽検出の正確性が変わることはないという仮説3は支持されなかったと言える。

考察

研究2では、研究1の問題点について修正を行い、トリガーに抵触する条件が、虚偽認知・虚偽検出にどのように影響を与えるのかについての検討を行った。

1. 仮説1の検討 仮説1aは、嘘の教示が無い参加者は、真実デフォルト状態であるため、嘘の教示がある参加者に比べて刺激人物への評価が高くなるというものであり、仮説1bはトリガーが多いほど、刺激人物への評価が低くなるというものであった。

研究2において、嘘教示の有無によって好意度および信用得点においては有意差は見られなかったが、番組好意得点においては有意差が見られ、嘘教示無条件の方が得点が高かった。この結果は仮説1aを一部支持するものであったと言えよう。好意度および信用得点において嘘教示の有無による差が見られなかった理由として、この2つは刺激人物の特性への評価であるのに対して、番組好意得点は刺激人物の話への評価のためだと考えられる。つまり、真実デフォルトの放棄は、他者のコミュニケーション内容についての認知に影響するのであって、直接他者の個人特性や印象の評価には影響しないのではないだろうか。ただし、伊藤ら (2015) でも虚偽認知は好意度を媒介して関係継続意思に影響を及ぼしているし、研究2においても、番組好意得点は好意度 ($r = .47, p < .001$) および信用得点 ($r = .54, p < .001$) と中程度の相関を示している。このことから、真実デフォルトの放棄が必ずしも相手への印象評価につながらないとは言えないのではないだろうか。

また、仮説1aと同様に、番組好意得点の場合にはトリガーの数の主効果が見られたことから、仮説1bについても一部支持された。これについて、トリガーの数が多 (嘘教示有+不自然刺激) ほど、番組好意得点は低かった。このことから、不自然刺激かどうかについても、トリガーとして、話者に対する虚偽認知に影響を及ぼすことが示唆される。仮説1abが研究1では支持されず、研究2では部分的に支持されたことについては、連続して視聴した動画の数が影響した可能性が考えられる。つまり、研究1では上述したように、参加者は8本の刺激を連続して視聴したため、不自然刺激を視聴しても、数ある個人特性の1つとして捉えられやすくなった可能性が考えられる。一方、研究2では、その半数である4本の連続視聴に留まっていたために、不自然刺激は個人特性の1つとして捉えられにくくなりトリガーとして機能したのではないだろうか。

2. 仮説2の検討 仮説2aは、嘘教示の有無によって好意度では差が見られるものの、真判断割合では差が見られなくなるというものである。また、仮説2bは、他のトリガーの影響は真判断割合においても見られる、というものであった。これらについては全て支持されたと言える。研究1

では、嘘教示の有無が真判断割合に影響を及ぼしていたが、研究2では仮説通りにその影響が見られなかったことについては、研究1と2で虚偽判断に回答した刺激人物の数が影響したものと考えられる。つまり、研究1では全刺激を見終わったのち8人の刺激人物について回答を得た。一方で研究2では4人ずつの刺激人物について回答を得た。そのため、真実デフォルトが放棄され、本当か嘘かの確率(50%)で判断しようとした場合に、4人の場合だと2人の場合のみを50%だと思ふことが多い一方で、8人の場合だと5人や3人の場合でも約50%だと思ふことが多いのではないだろうか。しかし、研究1および研究2において、嘘教示無条件では刺激視聴の際は真実デフォルトが放棄されていないため、その印象の違いにより、嘘教示有条件より嘘教示無条件の方で真判断割合が少しではあるが高くなったのではないだろうか。仮説2bにおけるトリガーの数の効果については仮説が支持され、不自然刺激がトリガーとしての機能を持つことが示唆される。

3. 仮説3の検討 仮説3は、教示内容の違いによって、虚偽検出の正確性が変わることはないというものであったが、この仮説については支持されなかった。これについて、研究1では嘘教示無条件と嘘教示有・動機無条件との間に差が見られず、効果量も非常に小さかった。これに対して、研究2でも同様に有意差は見られなかったものの、小～中程度の効果量が見られた。この効果が生じた理由として、“嘘教示無の状況”があることが参加者の虚偽検出の方略に何らかの影響を与えた可能性があると考えられる。研究2では、教示の有無を参加者内要因として研究を行ったため、参加者は必然的に嘘教示無の状況に置かれた後に、嘘教示有の状況に置かれることとなった。そのため、ただ嘘教示有の状況に置かれた研究1の参加者よりも、より嘘を見抜こうとする姿勢が強まった可能性が考えられる。その結果として、参加者の虚偽検出の方略にも何らかの差異が生じ、教示内容の違いについて、小～中程度の効果量が見られたのではないだろうか。

総合考察

本研究の目的は、Levine (2014) の真実デフォルト理論を参考に、トリガーイベントに抵触する条件が、虚偽認知と虚偽検出の正確性に及ぼす影響についての検討を行うことであった。研究1では、トリガーの“第三者からの警告”に対応した条件として嘘教示の有無を設定し、トリガーの“計画された動機”に対応した条件として動機教示の有無、トリガーの“メッセージ内容の一貫性のなさ”および“コミュニケーション内容と既有知識との不一致”に対応した条件として刺激内容の不自然さとして検討を行った。結果として、虚偽認知を好意度として捉えた場合にはトリガーの影響が見られず、虚偽認知を真判断割合として捉えた場合では、嘘教示の有無による影響が見られた。研究2では、研究1の問題点を修正して研究を行った。その結果、虚偽認知を好意度として捉えた場合にはトリガーの影響が見られ、虚偽認知を真判断割合として捉えた場合では、嘘教示の有無による影響が見られなくなった。このことから、嘘に関する実験の結果は実験方法に依存していることが示された。また、他のトリガーについての重要性についても示唆された。研究1および2において好意度および信用得点において実験操作の影響が見られなかったことについては、研究2で行った自由記述によりその理由が示唆される。印象判断の基準についても、嘘判断の基準についても、“話し方”、“手足の動作”、“声のスピード”などの同様の回答が得られ、特に、

“視線 (目の動き)” という項目については、印象判断の基準 (24 人) でも、嘘判断の基準 (16 人) としても共に半数以上が判断の基準として挙げている。これらのことから、好意度などの印象判断と、虚偽判断は関係が深いことが示される。しかし、10 人以上が印象判断と嘘判断の基準として回答した項目として、印象判断においては“表情” (11 人)，“声” (12 人)，“手足の動き” (13 人) があるのに対し、嘘判断については、“話の内容” (21 人) があった。このことから、2 つの判断は同様に捉えられる場合もあるが、多くの人はその他の基準をもって 2 つを異なるものとして捉えているのではないかと考えられる。

本研究の意義

本研究の意義として、“嘘に関する実験における、嘘教示の有無の重要性を明らかにしたこと” が挙げられる。さらに、仮説 3 についての結果から、嘘教示の有無は虚偽認知に関する研究だけでなく虚偽検出に関する研究にも少なからず影響を与えることが示唆された。これまで、嘘に関する実験では、嘘教示は刺激提示の前後どちらかで行われていた。しかし、本研究の結果から、嘘教示のタイミングは結果に重要な影響を与えることが示された。このことから、嘘に関する実験を行う際には、目的に即した教示のタイミングを考えることが必要となると考えられる。例えば、裁判員裁判のような場面で対象が嘘をつく必要があるような現実場面について検討する研究であるならば、嘘教示は刺激提示の前に行わなければならない。しかし、詐欺やキャッチセールスなど、基本的には嘘の存在が予告されない現実場面を検討する研究であるならば、嘘教示を刺激提示の後に行う必要がある。そうでなければ、人間の虚偽認知や虚偽検出能力を過大、あるいは過少に判断してしまう恐れがあることが、本研究から推察できる。

本研究の限界と課題

最後に、本研究の課題と限界について述べる。本研究の限界としては、次の 2 点が挙げられる。

まず 1 つ目に、“一方向でのコミュニケーションによる検討しかできていないこと” である。本研究では、刺激動画を用いて、参加者が刺激人物の話している内容について聞くという刺激人物から参加者への一方向へのコミュニケーションしかなされていない。しかし、Levine (2014) は、虚偽のプライムの他に、“戦略的な質問や、有用な情報へのアプローチといった、文脈に頼ることができない” ことを虚偽実験の問題点として指摘している。その理由として、虚偽検出能力は、戦略的な質問等に頼ることにより、十分に改善される余地があるということを述べている。そのため、本研究のような一方向のコミュニケーションではなく、双方向のコミュニケーションが可能な実験場面を用いて検討することが必要になると考えられる。

次に、“トリガーイベントに抵触する条件が十分に検討されたとは言えない” ことである。本研究においては、“不誠実な態度と関連した行動の提示” というトリガーについては全く検討されていない。また、“計画された動機” というトリガーについても先行研究では真実デフォルトの放棄が促進されたにもかかわらず (Levine, Kim & Blair, 2010), 本研究においては有意な影響が見られなかった。研究 1 での教示の方法に問題があった可能性があるが、その他に研究 1 では研究 2

のように番組好意得点で検討していなかった点についても、問題であったように思われる。また、“個別のトリガーとしての度合い” に関しても全く検討されていない。本研究ではトリガーの数が増えるほど、虚偽認知が増すという結果が得られたが、Levine (2014) によると、トリガーには2種類の閾値があり、1つ目の閾値を超えるだけでは積極的な疑いは発生しないことが述べられている。このことを踏まえると、トリガーに抵触する条件を検討する場合においても、その抵触する度合いについて詳しく検討する必要があると考えられる。さらに、“トリガーに抵触する条件として本研究の条件は妥当であったか” という点についても疑問点が残る。本研究では、“メッセージ内容の一貫性のなさ” や“コミュニケーション内容と既有知識との不一致” に対応した条件として不自然刺激を用いた。しかし、McCornack (1992) の“情報操作理論” によると、会話の参加者が守るべきとされる会話の公準を破る発言は欺瞞的であると判断されるとしている。会話の公準には、関係のあることを述べるという“関係の公準” や、曖昧な表現や冗長さを避けるという“様式の公準” などがある。TDTにおける上述した2つのトリガーに抵触する条件として定義する場合においても、本研究で用いたような不自然刺激といったトリガーの提示の仕方よりも、会話の公準を破るような発言を提示するといった操作のほうがより妥当なものになる可能性も考えられる。このように、トリガーに抵触する様々な条件について、より詳細に検討をしていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- Bond, C. F., & DePaulo, B. M. (2006). Accuracy of deception judgments. *Personality & Social Psychology Review, 10*, 214-234.
- 大工 泰裕・釘原 直樹 (2015). 潜在的欺瞞性認知が広告への態度に与える影響 GNATを用いた欺瞞性認知測定の試み——対人心理学研究, *15*, 77-84
- 伊藤 洋輔・平川 真・中島 健一郎・森永 康子 (2015). 無意識的思考が虚偽検出能力に及ぼす影響 広島大学心理学研究, *15*, 45-60.
- 木藤 恒夫・児玉 千絵 (2003). 嘘と本当を見分けられるか 神戸大学心理学研究, *2*, 37-48.
- Levine, T.R. (2014). Truth-Default Theory (TDT): A theory of human deception and deception detection. *Journal of Language and Social Psychology, 33*, 378-392.
- Levine, T. R., Kim, R. K., & Blair, J. P. (2010). (In) accuracy at detecting true and false confessions and denials: An initial test of a projected motive model of veracity judgments. *Human Communication Research, 36*, 81-101.
- McCornack, S. A. (1992). Information manipulation theory. *Communication Monographs, 59*, 1-16.
- McCornack, S. A., & Levine, T. R. (1990). When lovers become leery: The relationship between suspicion and accuracy in detecting deception. *Communication Monographs, 57*, 219-230.
- McCornack, S. A., Morrison, K., Paik, J. E., Wiser, A. M., & Zhu, X. (2014). Information manipulation theory 2: A propositional theory of deceptive discourse production. *Journal of Language and Social Psychology, 33*, 348-377.

- McCornack, S. A., & Parks, M. R. (1986). Deception detection and relationship development: The other side of trust. *Annals of the International Communication Association, 9*, 377-389.
- 村井 潤一郎 (2000). 青年の日常生活における欺瞞 性格心理学研究, *9*, 56-57.
- 村井 潤一郎 (2002). 発言の真偽判断に関する検討 日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 360-361.
- Reinhard, M.-A., Greifeneder, F., & Scharmach, M. (2013). Unconscious processes improve lie detection. *Journal of Personality and Social Psychology, 105*, 721-739.
- Rotter, J. (1980a). Interpersonal trust, truthworthiness, and gullibility. *American Psychologist, 35*, 1-7.
- Rotter, J. (1980b). Trust and gullibility. *Psychology Today, 102*, 35-42.
- 山岸 俊男・小見山 尚 (1995). 信頼の意味と構造——信頼とコミットメント関係に関する理論的・実証的研究—— *Journal of Institute of Nuclear Safety System, 2*, 1-59.
- 山岸 俊男 (1998). 信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム—— 東京大学出版会